

平成26年度★

学校改善支援プラン

～「H25全国学力・学習状況調査結果の分析」と「学力向上のための方策」～



●学力向上に関する資料

美の国あきたネット (<http://www.pref.akita.lg.jp/>) > 子育て・教育 > 学校教育 > 小・中学校

- ・学校改善支援プラン
- ・秋田県学習状況調査
- ・確かな学力の育成に係る実践的調査研究実践事例集
- ・全国学力・学習状況調査保護者向けパンフレット 等

★ タイトルの年度については裏表紙の説明を御覧ください。

秋田県検証改善委員会

I 全体的な分析

1 成果や要因

平成25年度の各教科の平均正答率からみた状況

※()の数値は全国比

全ての教科で、全国平均を5ポイントから9ポイント以上上回り、きわめて良好であると言えます。特に、「知識に関する問題(A)」よりも「活用に関する問題(B)」で、全国との差が大きいことが本県の特長です。

また、無回答率は全ての問題で全国平均よりも低い値(小学校は9割以上、中学校は7割以上の問題で全国の半分以下の数値)を示しています。

小学校6年生平均正答率

教科	H19	H20	H21	H22	H24	H25
国語A(知識)	86.1 (+4.4)	74.4 (+9.0)	75.3 (+5.4)	89.3 (+6.0)	86.9 (+5.3)	71.7 (+9.0)
国語B(活用)	69.0 (+7.0)	62.9 (+12.4)	60.4 (+9.9)	84.8 (+7.0)	63.0 (+7.4)	59.1 (+9.7)
算数A(知識)	88.4 (+6.3)	80.7 (+8.5)	86.2 (+7.5)	83.2 (+9.0)	79.5 (+6.2)	82.8 (+5.6)
算数B(活用)	68.6 (+5.0)	58.9 (+7.3)	63.7 (+8.9)	59.0 (+9.7)	64.0 (+5.1)	67.1 (+8.7)
理科					68.4 (+7.5)	

中学校3年生平均正答率

教科	H19	H20	H21	H22	H24	H25
国語A(知識)	85.4 (+3.8)	78.6 (+5.0)	82.3 (+5.3)	79.8 (+4.7)	79.7 (+4.6)	81.9 (+5.5)
国語B(活用)	77.0 (+5.0)	66.8 (+6.0)	81.8 (+7.3)	71.7 (+6.4)	70.3 (+7.0)	74.6 (+7.2)
数学A(知識)	77.5 (+5.6)	70.1 (+7.0)	68.8 (+6.1)	70.8 (+6.2)	67.4 (+5.3)	68.9 (+5.2)
数学B(活用)	65.3 (+4.7)	54.7 (+5.5)	63.4 (+6.5)	50.0 (+6.7)	56.7 (+7.4)	47.5 (+6.0)
理科					56.1 (+5.1)	

成果の要因

- 熱心で前向きに授業に臨む子どもたちの学習姿勢
- 自分の考えを書き、話し合いや練り合いによって高め合う、探究を重視した授業
- 学習のめあてや課題の提示、振り返りを充実させた「分かる・できる」授業の推進
- 定着している家庭での学習習慣と生活習慣
- 学校・家庭・地域の連携の強さ
- 校内研修会、小・中連携研究会、県・市町村の事業など研修システムの充実
- 学力調査結果の計画的な活用
- 大学との研修・研究に関する連携・協力

要因につながるデータ

※()内の数値は本県と全国との比較

質問紙調査の結果を全国と比べると、「当てはまる」と回答した割合がかなり高くなっています。

<児童生徒質問紙>

- 夢や目標の実現への努力 (小 + 8.9、中 + 4.9)
- 算数・数学の問題について、最後まで解答を書こうとした (小 +11.6、中 +12.9)
- 総合的な学習の時間における探究型の授業 (小 +13.1、中 +20.3)
- 7時前に起床している (小 +13.6、中 +17.2)

<学校質問紙>

- 相手の考えを最後まで聞く (小 +14.0、中 +15.8)
- 児童生徒の思考を深める発問 (小 +16.2、中 +12.8)
- 教師間で国語の家庭学習の共通理解を図った (小 +28.5、中 +14.3)
- 調査結果の公表や説明 (小 +10.9、中 +12.8)

「分かる」・「できる」授業の推進

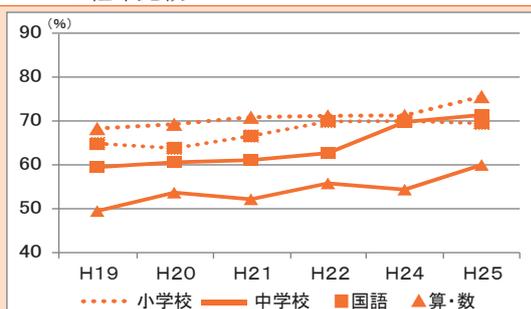
※()内の数値は本県と全国との比較、折れ線グラフの数値は選択肢「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」を選択した割合(%)

国語、算数・数学の授業が「好きだ」「分かる」と回答している本県の児童生徒の割合が伸びています。国語では、「好きだ」と回答している中学校の生徒の割合が、この6年の間に小学校の児童の数値とほぼ同じにまで伸びています。

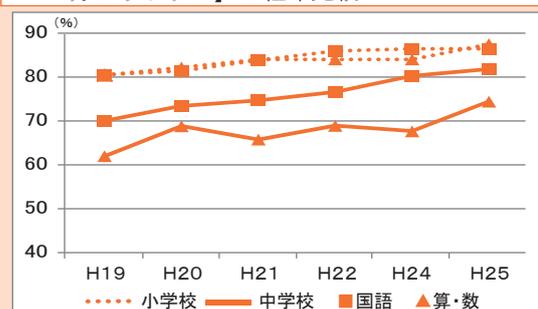
- 国語の勉強が好きだ (小 +11.5、中 +13.6)
- 算数・数学の勉強が好きだ (小 + 9.5、中 + 4.4)

- 国語の授業の内容がよく分かる (小 +6.2、中 +9.9)
- 算数・数学の授業の内容がよく分かる (小 +7.0、中 +4.6)

【国語、算数・数学の勉強が好きですか】の経年比較



【国語、算数・数学の授業の内容はよく分かりますか】の経年比較



2 秋田県の特長

(1) 探究型の授業の推進

※グラフの数値は「当てはまる・だいたい当てはまる」、「よく行った・だいたい行った」と肯定的な回答をしている割合(%)

本県では、学習の目的をもって、学習課題についてグループで話し合ったり、学級全体で意見交換をしたりするなどして課題解決を図る「探究型」の授業が盛んに行われています。授業展開に関する質問では、本県の児童生徒と教師の意識が高く、さらには、両者の意識の差が小さいことが分かります。これらのことから、本県では、児童生徒と教師とが一体となって取り組む質の高い授業が展開されていると言えます。

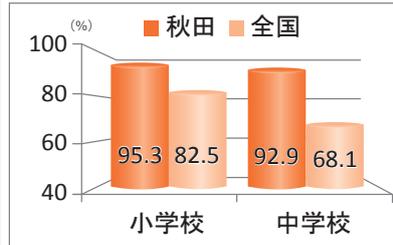
①めあて・学習課題の提示

児童生徒質問紙：普段の授業では、はじめに授業の目標（めあて・ねらい）が示されている。
 学校質問紙：授業の冒頭で目標（めあて・ねらい）を児童生徒に示す活動を取り入れている。

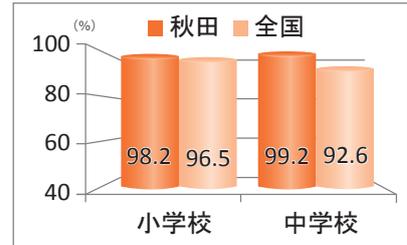


授業のはじめに本時のめあてやゴールを明確にすることで、児童生徒が学習に見通しと目的をもち、主体的に学習に取り組むことができるようになります。

【児童生徒質問紙の回答結果】



【学校質問紙の回答結果】



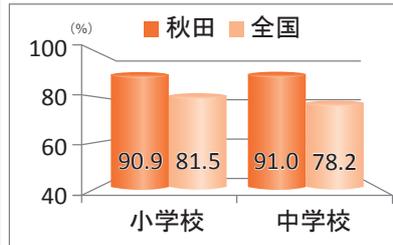
②発表の場の設定

児童生徒質問紙：普段の授業では、自分の考えを発表する機会が与えられている。
 学校質問紙：児童生徒の発言や活動の時間を確保して授業を進めている。

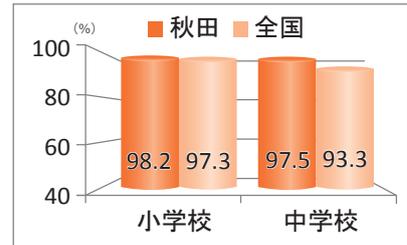


自分の考えや意見を述べる場面がしっかり設定されています。発表を通して児童生徒の表現力が高められるとともに、多様な意見や考えが、「学び合い」の充実につながっています。

【児童生徒質問紙の回答結果】



【学校質問紙の回答結果】



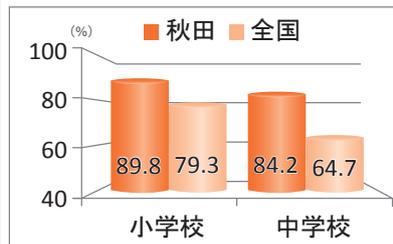
③学び合いの場の設定

児童生徒質問紙：普段の授業では、友達との間で話し合う活動をよく行っている。
 学校質問紙：学級やグループで話し合う活動を授業などで行っている。

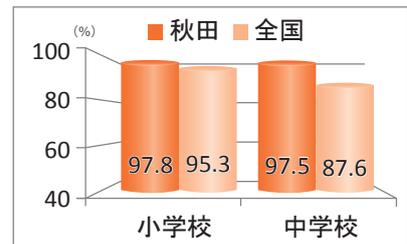


発表で出された意見や考えについてペアやグループで話し合う活動を多く取り入れています。自分の考えを更に広げたり深めたりする工夫がなされています。

【児童生徒質問紙の回答結果】



【学校質問紙の回答結果】



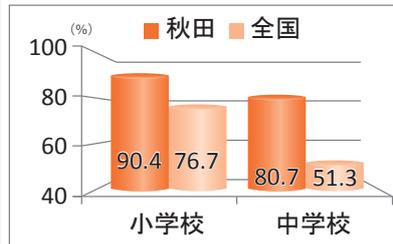
④振り返りの活動の充実

児童生徒質問紙：普段の授業では、最後に学習内容を振り返る活動を行っている。
 学校質問紙：普段の授業では、最後に学習内容を振り返る活動を計画的に取り入れている。

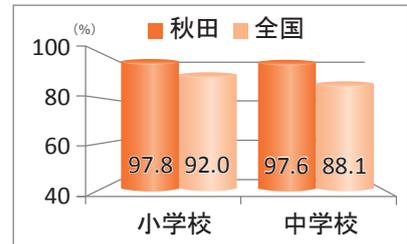


授業の最後に、板書やノート等を活用して、本時の学習内容を振り返ることにより、学習内容の定着が図られ、児童生徒の「分かる・できる」という実感につながっています。

【児童生徒質問紙の回答結果】



【学校質問紙の回答結果】



(2)校内研修の充実と小・中の連携

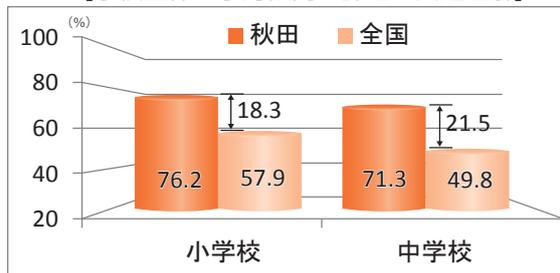
※数値は、選択肢「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した割合(%)

学校の教育目標やその達成に向けた方策について、全教職員による共通理解が図られています。また、学校全体の学力の傾向や課題についても共通認識の下、授業改善等が進められていることが分かります。

【教育目標の教職員による共通理解】

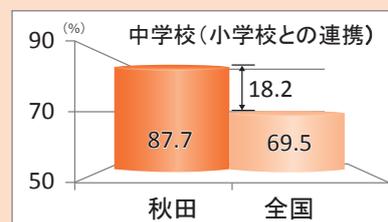
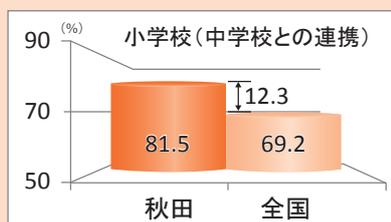


【学校全体の学力傾向や課題の共通理解】



本県の小・中学校では教科の指導内容や指導方法についても合同で研修するなど、小学校と中学校の連携が盛んに行われています。小学校のきめ細かい指導と中学校の専門的な指導が生かされた授業が「分かる」授業に結び付いています。

学校質問紙：教科の指導内容や指導方法について近隣の小学校、中学校と連携をしているか。

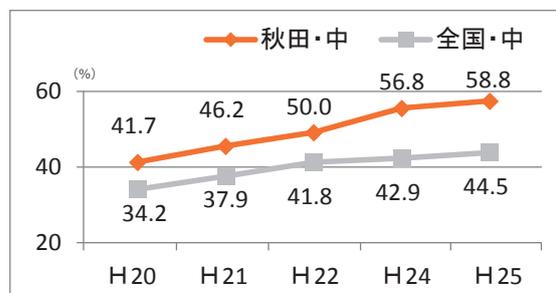
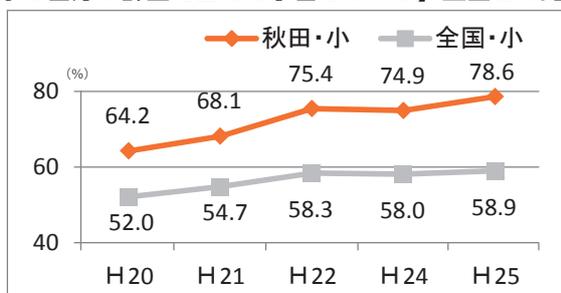


(3)家庭学習の充実

※数値は、選択肢「行っている」「どちらかといえば行っている」と回答した割合(%)

自主的に家庭学習に取り組んでいる本県の児童生徒の割合は、平成20年度から25年度まで伸び続けており、全国の小学校が約6%、中学校が約10%の増加に対して、本県の小学校は約14%、中学校は約17%増加し、年々その差が広がってきています。

【家で自分で計画を立てて学習している】全国との比較



【家庭学習が成果を上げている要因】

※数値は、選択肢「当てはまる」「だいたい当てはまる」等、肯定的な回答をした割合(%)と全国比

学校質問紙の家庭学習に関する質問内容	小学校	中学校
家庭での学習方法等の具体的な提示	89.8 (+ 7.3)	96.7 (+ 9.6)
家庭学習の与え方についての教職員間での共通理解	97.8 (+10.1)	88.5 (+10.2)

このほか、保護者への働き掛けなども行い、家庭学習の充実に努めています。

(4)地域への関心が高い秋田の子ども

※数値は、選択肢「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した割合(%)

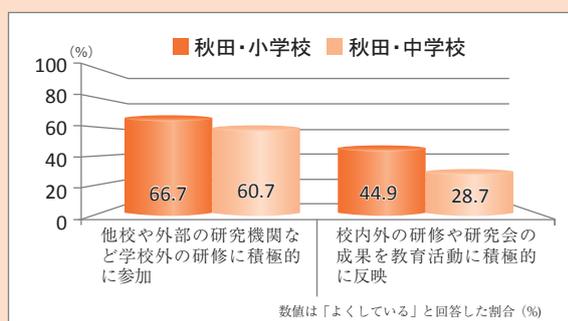
秋田の子どもたちは、地域で起きている問題や出来事に関心が高く、地域の行事やボランティア活動に積極的に参加しています。

質問事項 (児童生徒質問紙)	小学校		中学校	
	秋田	全国	秋田	全国
今住んでいる地域の行事に参加している	78.8	63.9	48.8	41.6
地域で起きている問題や出来事に関心がある	67.4	57.4	63.0	51.8
地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがある	52.2	38.6	37.9	26.8
地域社会などでボランティアに参加したことがある	72.7	61.3	57.9	44.6

3 今後の更なる改善に向けて

本県の教科に関する調査の結果や児童生徒質問紙、学校質問紙のデータ、学力向上フォーラムのパネルディスカッションで取り上げられた内容から、今後の更なる改善に向けたポイントについて取り上げました。

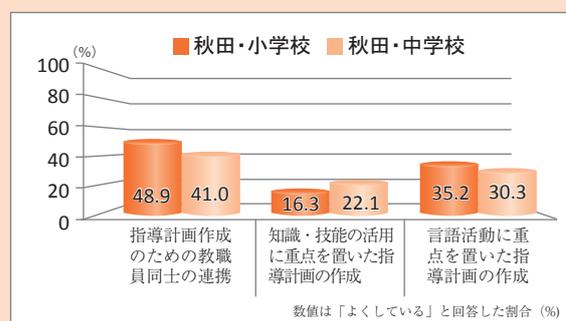
(1) 研修成果の教育活動への反映



他校や学校外の研修に積極的に参加している学校の割合に比べ、その研修成果を自校の教育活動に反映させている学校の割合は大きく減少しています。

研修成果を教職員で共有化し、自校の教育活動に反映させるためには、**各校の研修リーダーが中心となって、校内の研修システムを点検するとともに、機能化を一層進めることが重要です。**

(2) 指導計画の作成・見直し



本県の小・中学校における共同研究体制に関する回答は、おおむね良好な結果ですが、**学習指導計画や評価計画作成の視点**から見ると、課題があることが分かります。

「知識・技能の活用」「言語活動」に重点を置いた指導計画については、**これまでの計画を活用し、必要に応じて見直すなどして、実践に結び付けることが必要です。**

(3) 全国の平均通過率を下回る問題の傾向

※数値は平均正答率 (%)

全国の平均正答率に達していない問題は、B問題よりも、基礎的な知識の定着を見るA問題に多い傾向があります。具体的な課題やその傾向を見極めることも、授業改善のポイントを見付ける近道です。

実施年度	教科・問題番号	出題された問題の趣旨	本県	全国
平成 25 年	小学校国語 A 2 一	ことわざの意味理解	70.7	71.1
	中学校数学 A 9	関数の意味理解	13.4	13.8
	中学校数学 B 3 (3)	事柄を数学的な事象として捉える	26.2	26.9
平成 24 年	中学校国語 A 7 四ア	適切な対義語の選択	86.9	87.5
	中学校数学 A 6 (1)	三角定規による平行線の作図の理解	42.0	43.6
	中学校数学 A 6 (3)	三角形の合同条件の理解	66.0	66.8
	中学校理科 A 2 (1)	電流の読み方の技能	41.8	44.3
平成 22 年	中学校理科 B 3 (2)	地層の傾きについての理解	30.3	31.2
	中学校国語 A 10 三エ	適切な敬語の選択	51.9	52.8

(4) 「学力向上フォーラム」で取り上げられた本県の成果と課題

学力向上フォーラム(平成25年10月12日(土)実施)

パネルディスカッションでは、パネリストの方々から、本県の教育について、次のような**成果と今後取り組むべき課題**について提言がありました。

【これまでの成果】

- 探究型の授業の推進
- 安定した学級集団
- 小中連携による授業研究の取組
- 入念な教材研究や教材の準備
- 思考を深めるための学習形態の工夫
- 自分の考えを明確にさせる指導の工夫

【今後の課題】

- 探究を更に深めるための「ゆさぶり」「問い直し」の不足
- 児童生徒の自力解決を促す発問・助言の工夫の不足
- 小中連携の地域による温度差
- 中学校における教科の壁を超えられない研究体制
- 学級集団の力を高める共同研究の不足

II 各教科の成果と課題

国 語

<成果>

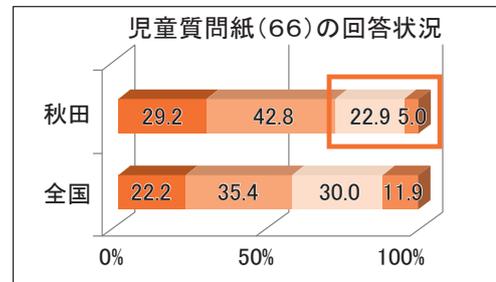
- 平均正答率では、A問題よりもB問題で全国平均を大きく上回っている。
 - ・小B3二「推薦文を比べて読み、それぞれの読み方として適切なものを選択する」(全国比+8.1)
 - ・中B3二「漢字の特長を捉えて、自分の考えを具体的に書く」(全国比+10.0)
- 「国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりする」、「国語の授業で話し合いをするときに、司会者として発言をまとめたり、参加者として立場や理由を明らかにして発言したりする」と回答した児童生徒の割合が全国を大きく上回っている。

<課題>

- 小学校では、「ことわざの意味を理解する」【A2一】、「文と文のつながりを考えながら接続語を使って内容を分ける」【A3二(1)】、「目的や意図に応じ、複数の内容を関係付けながら自分の考えを具体的に書く」【B2三】に課題がある。
- 中学校では、「語句の意味を理解し、文脈の中で適切に使う」【A8三ア】、「比喩を用いた表現について理解する」【A8七1】、「文章の構成や表現の特徴を捉えて読む」【B3一】など、語句の理解や表現技法、表現の特徴を捉えることに課題がある。

<平均正答率と児童生徒質問紙の関連>

小学校【A3二(1)】(本県正答率33.4、全国23.4)に関する児童質問紙Ⅰ(66)「国語の授業で、分かりやすい文を書くために、2つ以上の文を1つにまとめて書いたり、1つの長い文を2つに書き分けたりしますか」の質問に対し、本県では28%の児童が否定的な回答をしていることから、約3割程度の児童が普段、文章を書く過程での言語操作を意識していないことが分かる。指導に当たっては、国語科のみならず、他教科においても、機会を捉えて文と文の関係を意識して書くことの指導を重視したい。



算数・数学

<成果>

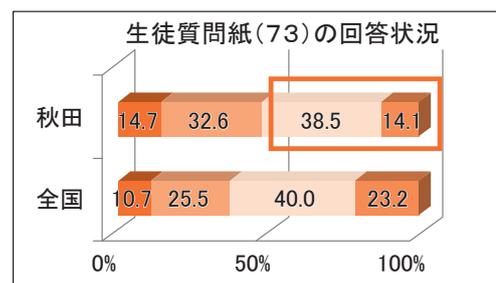
- 平均正答率では、A問題よりもB問題で全国平均を大きく上回っている。
 - ・小B1(1)「情報を整理し、筋道立てて考え、三つの条件に当てはまるものを選択」(全国比+15.1)
 - ・中B5(1)「資料から適切な情報を読み取る」(全国比+11.9)
- 児童生徒質問紙で「学習したことを普段の生活の中で活用できないか考える」と回答した児童生徒の割合と、学校質問紙「実生活における事象との関連を図った授業を推進している」と回答した教師の割合が全国を大きく上回っている。

<課題>

- 小学校では、「二つの数量の関係の求め方と、それらの関係が比例の関係ではないことを記述すること」【B2(3)】、「単位量当たりの大きさを求める除法の式の意味を理解すること」【B4(1)】に課題がある。
- 中学校では、「関数の意味を理解すること」【A9】、「事象を理想化・単純化して、事柄を数学的に捉え、他の事象との関係を考えること」【B3(3)】、「事象と式の対応を的確に捉え、事柄が成り立つ理由を説明すること」【B6(3)】、「多角形の外角」【A6(2)】に課題がある。

<平均正答率と児童生徒質問紙の関連>

中学校【B4(1)】(本県正答率36.3、全国32.4)に関する生徒質問紙Ⅱ(73)「数学の授業で図形の証明について学習するとき、1つの図形だけでなく、いくつかの図形について証明したことが成り立つかどうかを調べるようにしていますか」の質問に対して、本県では52%の生徒が否定的な回答をしている。各教科の指導においても、児童生徒が自分以外の考えや意見について検証し、そのよさについて気付かせる場を意図的に設定したい。

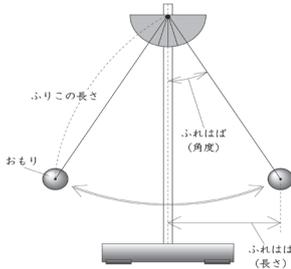


< 小学校算数B2(3) >

【出題の趣旨】目的や意図に応じ、複数の内容を関係付けながら自分の考えを具体的に書くことができる。
平均正答率 県44.4%(全国35.2%)

2

ゆきこさんは、ふりこの実験を3つします。
実験では、ふれはばは変えないで、ふりこの長さとおもりの重さを変えたときに、ふりが1往復する時間がどのようになるかを調べます。



(3) 実験3では、おもりの重さを40gにもとし、ふりこの長さを変えて10往復する時間を調べ、下の表にまとめました。

実験3の結果

ふりこの長さ (cm)	25	50	75	100
10往復する時間 (秒)	10	14	17	20

この結果から、次のことがわかります。

ふりこの長さを2倍に変えたとき、10往復する時間は2倍になっていないので、ふりこの長さとおもりの重さは比例していません。

「ふりこの長さを2倍に変えたとき、10往復する時間は2倍になっていない」ことを、上の表の中の数と言葉を使って書きましょう。

〈予想される児童のつまずき〉

- ・口頭では説明することができるが、書くことができない。
- ・表の中のどの数値を見ればよいのかが分からない。
- ・授業で学習した表では、1、2、3…と変わるのに、この表は変わり方が違うので、どうやって書いたらよいか分からない。

〈思考を促す発問例〉

- ①比例しているかどうかの理由の説明に必要な条件を意識付ける
児童が「比例しているわけ」を言葉と数を使って書く場を設定し、みんなでよりよいものをつくり上げるための発問を重視する。
「この説明で、比例しているわけは伝わりますか。」
「A君の説明で、比例について分かりやすく伝えるための工夫はどこなところですか。」
- ②比例の意味の理解を深める
どの数値を基準にしても説明できることへの気づきを促し、比例していない場合との比較で、比例の特徴を明確にする。
「A君の説明で取り上げていない数値でも同じことが言えますか。」
「比例していない場合には、そのわけを言葉と数を使って書きましょう。」

< 中学校数学B3(2)、(3) >

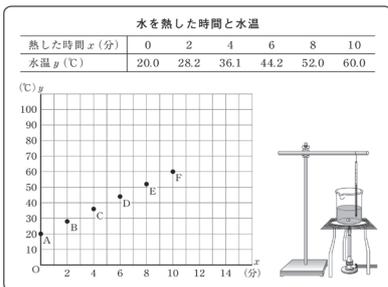
【出題の趣旨】事象を理想化・単純化して、言葉で表現された事柄の数学的な意味を的確に捉え、他の事象との関係を考えることができる

(2) 平均正答率 県43.0%(全国31.7%)、(3) 平均正答率 県26.2%(全国26.9%)

3

太一さんは、水を熱したときの水温の変化を調べました。そして、水を熱した時間と水温について下の表のようにまとめ、 x 分後の水温を y として、グラフに表しました。

調べた結果



次の(1)から(3)までの各問に答えなさい。

- (1) 水温は、熱し始めてから10分間で何℃上がりましたか。10分間で上がった温度を求めなさい。
- (2) 太一さんは、水温が80℃になるまでにかかる時間を求めるために、調べた結果のグラフにおいて、水を熱した時間と水温の関係を表す点Aから点Fまでのすべての点が一直線上にあると考えました。
このとき、水温が80℃になるまでにかかる時間を求める方法を説明しなさい。ただし、実際に時間を求める必要はありません。
- (3) (2)では、水を熱し始めてから x 分後の水温 y ℃について調べました。ここでは、2つの数量 x 、 y の値の組を調べ、それらの関係を表す点がグラフ上で一直線上にあると考えました。これと同じように考えて求められるものが、下のAからEまでの中にあります。正しいものを1つ選びなさい。

標高と気温
何℃?

標高500mの富士山のふもとにある河口湖湖畔所標高90mの地点で23.3℃のときの富士山の各目(標高2500m)の気温

知られていること
ある地点の気温 y では、海上から1.7mで下りてくると、気温 x が低くなるようにもなっていて、100mごとに約0.6℃下がる。

通さと時間
何分?

家から2100m離れた図書館まで分速70mで移動するときにかかる時間

知られていること
ある道のりを分速 x mで y 分移動するとき、 x と y の積は一定である。

重さと料金
何円?

重さ x gの郵便物の料金は140円

知られていること
重さ x gの郵便物の料金は y 円は、30gまでは120円、100gまでは140円のように、重さによって決められている。

時刻と気温
何℃?

家から500m離れた公園の気温が10℃だった日の15時の気温

知られていること
時刻 x は、時刻から y 時間後の気温 y では、時刻から14時ごろまでは気温が一定である。その後の時刻 x の値によっては y が異なる。

〈予想される生徒のつまずき〉

- ・実験や観察の結果を理想化したり単純化したりすることで一次関数とみなすことができない。
- ・日常生活や社会から一次関数とみなせる事象を見いだして考察する際に生かすことができない。

〈思考を促す発問例〉

- ①一次関数とみなすことの意味を理解できるようにする
水を熱し始めてからの時間とそのときの温度を調べる実験結果を一次関数とみなすことよきとして、表、式、グラフを用いて処理し予測できることを実感させる。
「水温が80℃になるのは何分後と予想できますか。なぜ予想することができるのですか。」
- ②一次関数とみなすことのできる事象かどうかを比較・検討させる
一次関数とみなすことができない事象を取り上げ、その根拠を明確にする。
「どんな関係かを考えるために、まず表にしてみよう。(グラフ、式にしてみよう。)」
「表した表、グラフ、式を使って、その理由を説明してみよう。」

IV 成果を上げている学校の実践事例～共同研究による学力向上～

① 話型を効果的に使った授業改善

次に示す小学校と中学校では、「話型」を取り入れることによって児童生徒の思考力や表現力の育成に取り組んでいます。

【A小学校】グループ活動において、児童が目的をもって主体的に活動を進めることが重要であるとの考え方から、**話型指導を通して学習リーダーを計画的に育てています**。これにより、**児童主体の探究型の授業が活性化**されています。

【学習リーダーに必要な能力】

- ◎ 発表された意見や考えを整理、集約する司会者としての力
- グループ活動での学習時間の設定、作業等の指示
- グループでの発表者の指名等

【学習リーダーの選定と育成】

- ・ 児童の得意教科教などを加味して教科ごとに設定
- ・ 学期毎のサイクルで、学習リーダーの入れ替えを行う。(旧リーダーが新リーダーに適宜指導する)
- ・ 4月からの約1か月で、学習リーダーとしての基本を身に付けさせる。

話型の設定

具体的なグループ活動の場面と学年の発達段階に応じて使用する話型を段階的に設定する

◇ 「話し合い」の基本的な話型例

- ① 「〇〇さんから発表してください」
- ② 「この考えのよさはどこですか」
- ③ 「質問はありませんか」
- ④ 「似ているところはありませんか」
- ⑤ 「違うところはありませんか」
- ⑥ 「今日の課題を確認しましょう。では、まとめをどうしますか」
- ⑦ 「今日のまとめは、〇〇です」

【話型を使用した実際の学習場面】

(意見交換の場面で)



「早くできて分かりやすい方法はどれですか。」(比較)

(本時のまとめの場面で)



「今日のまとめは、どのようにしますか。」(集約)

【B中学校】授業に、生徒が「選ぶ」「書く」「説明する」活動を設定し、その中で「伝え合う」段階の話型と意見や考えを深めるための「練り合う」段階の話型を組み合わせることで、**思考力・判断力・表現力の育成に効果**を上げています。

4月に全校で話型ガイダンスを実施

「伝え合う」話型

意見
賛成
類似
補足
相違
反対
確認

+

① 全教育活動で使用する話型

〔練り合いの段階で使う話型〕

質問	なぜ、そう言えるのですか。その理由を教えてください。
提案	Aさんの考えをもとにすると、〇〇という考え方もできます。
修正	△△と考えていましたが、Bさん意見を参考にして考えを〇〇に修正します。
まとめ	AとBの意見をまとめるとCということになると思います。

全教育活動で話型を使用

人の話を主体的に聞き、自分の考えと比較し積極的に意思表示する姿



授業での活用

② 思考力・判断力・表現力を高める活動の設定

選ぶ	書く	説明する
自分の立場や根拠を明確にする (判断力)	自分の考えを論理的に書く (思考力)	自分の考えを表現し相手を説得する (表現力)

「選ぶ」「書く」「説明する」の各活動の中でも、「思考・判断・表現」に係わる話型が効果的に使われることで、思考力・判断力・表現力が培われる。

※この中学校区の小学校でも、話型を使った授業に取り組んでいます。

②思考力・表現力を高めるための弾力的な単元構想

【C小学校】この小学校では、算数科を窓口にして研究を進めています。児童に思考力・表現力を身に付けさせるための「重点単元」を設定して効果的な指導を行っています。

重点単元の設定のポイント

- 児童の思考力を高める手立てとしての算数的活動を構想する。
- 算数的活動や思考を表現する場を効果的に取り入れるための単元構想を工夫する。

思考力を高める算数的活動

- ・具体物を用いた活動
- ・作業的、体験的な活動
- ・発展的、応用的に考える活動

単元構想の工夫

- 単元の導入部に設定し、単元を貫く意欲につなげる。
- 単元の展開部に設定し、思考を深めたり新しい考えを導き出したりする。
- 単元の終末部に設定し、考えたことを確認したり深めたりする。

<重点単元の構成例>

	1年生	4年生
単元	たしざん(2)	角の大きさ
算数的活動	たしざんの問題を作成し、隣の学級と交換して問題を解き合う活動を設定	単元の導入部に具体物やデジタルコンテンツを用いた活動を設定
単元構成	終末部に思考力・判断力・表現力の育成と知識を定着させるための時間を設定	基礎的な知識の定着を重視した指導順や指導時間の変更

③板書計画を活用した指導技術の向上

【D小学校】この小学校では、夏冬の2回、各教諭の授業の板書をまとめた「スキルアップ集」を作成しています。実際の授業の板書から、授業の成果と課題を明らかにして授業改善に役立てています。

◎板書計画を活用した指導技術の向上

- ①研究授業の事前研修として、実際の授業を想定した板書の検証

- ・児童の思考の流れが構造的に見える板書計画か
- ・板書のスペースは適切か
- ・板書の情報量は適切か

- ②授業研究会

- ③事後研究会で、事前に想定した板書と実際の板書のズレをチェック

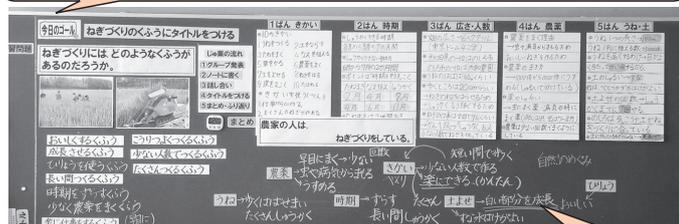
- ④日常実践での課題解決

スキルアップ集は、他の教師の指導技術を学ぶことができるだけでなく、夏から冬までに自分の板書がどう改善されたかも検証することができます。

(1)板書紹介

「農家の仕事」の単元、「ねぎづくりのくふう」について①グループ発表、②くふうについての話し合い、③タイトルをつける、の一連の活動の全板書である。

上段左は「本時のゴール」と「学習問題」、「見学時の写真」と「授業の流れ」、右側に、グループごとの発表資料を掲示した。グループの資料は、1つの班の発表が終わることに、児童が指定の場所に貼っていくように効率化を図った。



下右段は、子ども達が気付いた工夫をノートに書いた後に、発表した内容を板書したものである。その後、左側にねぎづくりの工夫にタイトルを付けて、あらかじめ発表が予想されるものは短冊で貼り、そうでないものは板書していった。

④教科・学年・校種を超えた共同研究

【E小学校・E中学校区、F中学校区他】

これらの小・中学校区では、「言語活動の充実」、「学習集団による探究」、「ねらいの明確化」などの研究テーマを設定し、小・中学校の先生方が、教科の壁、校種・学年の壁を超えて、共同で「事前研究→研究会→当日のワークショップ型検討会」を行い成果を上げています。

E小学校・E中学校区の共同研究チーム

- チーム構成：小・中学校、各教科、各学年、研究主任による5～8名で構成
- 小・中合同チームの事前研究会の内容

- ①教材選定新設した
- ②教材研究研修内容
- ③目標(ねらい)の決定

新設した研修内容

- ④指導案作成
- ⑤模擬授業の実施

事前研究会

小・中合同チームによる事前検討会

小・中全教員による指導案検討

- 教材選定の段階から合同で研究することで、授業改善の視点が深まり、より質の高い共同研究が可能になります。

1. 秋田県の先進性とその継承・発展

秋田県が全国学力・学習状況調査で6回連続で全国トップクラスの成績を達成しているのには、理由があります。①子どもの授業に向かう姿勢の良さ、②先生方の指導力の高さ、特に課題追究・探究を重視した授業やめあて・振り返り重視の授業、③授業研究システムの充実、④家庭学習の習慣化、⑤学校・家庭・地域の連携の強さなどです。全国的に見て、先進的な教育が行われています。

ただし、これから秋田県は、先生方の世代交代の時期に突入します。秋田の教育をリードしてきた多くのベテランの先生方が退職されます。優れた秋田県の教育を若い世代が確かに継承し、さらに発展させていく気概と具体的な取組が必要となります。その際にポイントとなるのが、共同研究の質です。授業研究会から日常的な共同研究に至るまでベテラン世代と若い世代との中身の濃い「共同」が鍵となります。秋田県教育の先進性の継承と発展を強く意識していただきたいと思います。

2. 授業の共同研究の継承・発展のポイントー「壁を超える」と「外部助言者」

秋田県の授業は、地域や学校による質の差は少ないと言えます。とは言え、子どもに身に付けさせる教科内容（目標・ねらい）が曖昧なまま、（言語）活動や課題追究が展開されている授業、教材研究が浅いレベルのまま進められている授業、子どものつまずきを十分に予測できていない授業、一部の子どもと教師だけで展開されている授業、ワークシート依存の授業なども一部に存在します。

そういった授業の背景には、共同研究体制の弱さ・形骸化があります。研究授業に向けた打合せはあるものの実質的に授業者が孤軍奮闘しているケース、研究授業後は互いに良さをほめ合うだけで課題や改善点が見えないケース、研究授業が日常的な共同研究につながらないケースなどです。

こうした問題を乗り越える鍵となるのが、「壁を超える」と「外部助言者」です。

中学校は教科担任制のため、全校的な共同研究を進めにくい場合があります。「自分の専門外だから」という理由から共同研究を放棄してしまうのです。教科の専門性を重視することは大切です。その上で、あえて教科の壁を超えて、事前研究→当日のワークショップ的検討→事後研究と、チームを作って共同研究を進めることで、より豊かなより広がりのある授業改善が可能となります。

小・中連携も、相互に授業を見せ合うだけでなく、事前研究の段階から小・中合同の研究チームで準備を進めてほしいと思います。ここでも教科の壁を超えることでより質の高い研究が展開できます。

また、校内研、小・中合同研などで外部の助言者の力を活用することも、授業研究の質を上げるために重要です。県・センター・市の指導主事、教育専門監、大学教員などに、当日だけでなく事前研究から関わってもらい、学校に来ていただく、学校から出かける、メールで連絡を取り合うなど、事前から活用するのです。助言者を多く依頼している学校ほど学力が高いというデータがあります。

3. これまで以上の授業づくりのために「ゆさぶり」と学び合い指導の発展を

昨年10月の「学力向上フォーラム」で「子どもの探究がまだ浅いのに、それでよしとしている授業がある」という指摘がありました。子どもに力がついてきた段階では教師は簡単に「納得」しないで「でもね」と子どもたちに「ゆさぶり」発問をし、更なる探究に向かわせることも大切です。

また、学び合いの際に使われるグループ学習についても、まだまだ追究すべき課題があります。グループの人数、グループ構成、学習リーダーの設定とその指導、話合いの時間、その際の教師の助言一などについての丁寧な検討が必要です。何よりそのグループの話合いで、子どもにどのような試行錯誤、どのような発見をさせようとしているのかの見通し・意識化がもっと必要です。

4. 30人程度学級の全学年への拡充と、学校間格差の改善、多忙化の解消ー教育委員会への提言

秋田県は、小1～小4、中1～中2で実施してきた「30人程度学級」を平成26年度から中3にまで拡充します。子どもたちの学力保障にとって大切なことです。早い時期に小5・小6にも広げていただきたい。

また、地域間・学校間の学力格差の解消のために教員数を拡充したり、改善が必要な地域・学校には、上記で述べた助言者の継続的な派遣などを行い、校内研究の改善、小・中連携研究の実施等について助言を受けることができるようにしたりするなど、さまざまな授業改善の具体的方策などについて手厚い支援をお願いいたします。

先生方の「多忙化」解消にも取りくんでほしいと思います。先生方が質の高い授業を行うためには時間の保障が必要です。実務の肥大化への対策、中学校の部活動指導の負担軽減などは必須です。部活動指導の外部委託の取組は全国で始まりつつありますが、秋田でも取り組んでいただきたい。

本県の小・中学校のよさを生かし、更に充実・発展するために

検証改善委員会では、全国学力・学習状況調査のデータを基に、「安定した成果を示している学校」「課題の改善状況が顕著である学校」がどのような特徴をもっているかを調べ、学力を支える関連因子をいくつか見付け、それらを「一人一人の学力を伸ばすあきたの学校～5つのエッセンス～」としてまとめました。

各学校において、「5つのエッセンス」を児童生徒の一層の学力向上に活用していただければ幸いです。

一人一人の学力を伸ばすあきたの学校 ～5つのエッセンス～

1 学校体制でPDCAサイクルの確立

毎年、効果のある取組を進めている学校では、教科や学年・校種を超えた、教員の共同研究が推進されています。質問紙では、「全国調査等の問題及び結果等を全校体制で活用する」「教育目標やその達成に向けた方策について共通理解し、取り組んでいる」などが全国の結果を大きく上回っており、本県が提唱する全国学力・学習状況調査、県学習状況調査、高校入試を一体と捉えた検証改善システムの充実が進んでいます。

2 子どもたちが積極的に授業に参加できる学校空間

児童生徒質問紙では「難しいことでも恐れなくて挑戦する」「自分の行動や発言に自信をもっている」など、学校質問紙では「熱意をもって勉強している」「授業中の私語が少なく落ち着いている」などが全国の結果を大きく上回っています。これは子どもたちが前向きで真摯な姿勢であることはもちろんですが、児童生徒の自己有用感を大切にする本県の教師・学校のきめ細かく温かい授業づくりや生徒指導が生み出した結果です。

3 子どもたちの思考を促し深める授業づくり

本県では、子どもたちが自ら考えることを大切にする授業が多く行われています。また、学習課題についてグループで話し合わせたり、学級全体で意見交換させたりする探究型授業も盛んです。今年度の質問紙では「授業のはじめに目標(めあて・ねらい)が示されている」「授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っている」などが高い数値を示しています。教師と児童生徒が目標を共有して授業を展開していることが、本県の質の高い授業につながっています。

4 自発的学習を生み出すきめ細かな指導

子どもたちに確実に学力を身に付けさせるためには、教師待ちでない自発的な学習を促す指導が大切です。質問紙でも、「自分で計画を立てて学習する」「家で苦手な教科の勉強をする」などが全国の結果を大きく上回っています。今後更なる学力向上を期して、家庭学習充実のための指導、補充学習の取組、自ら「問い」をもつことができる子どもの育成等の充実に向け、学校体制として継続的に取り組むことが求められています。

5 豊かな教育力を生む学校・家庭・地域の強い連携

家庭と地域が、強く学校を支持してくれていることが、本県の教育の強みです。子どもたちの授業への姿勢、家庭学習の充実なども、それと関わりがあります。秋田県では、学校から家庭や地域への働きかけ・呼びかけが特に丁寧に行われています。それが、学校・家庭・地域の豊かな連携を生み出します。

平成25年度秋田県検証改善委員会委員一覧(敬称略)

阿部 昇 (秋田大学教育文化学部教授)
清水 静海 (帝京大学教育学部教授)
吉川 正一 (義務教育課長)
京極 雅幸 (総合教育センター副所長)
遠藤 元博 (北秋田市教育委員会学校教育課長)
藤垣真紀子 (秋田市教育研究所長)
高橋 成浩 (横手市教育委員会教育指導課長)
板垣 直俊 (にかほ市立金浦小学校長)
佐藤 心一 (大仙市立西仙北中学校長)
土田 尚子 (羽後町立三輪小学校長)
大塚 久隆 (義務教育課副主幹)
鷲谷 真一 (義務教育課副主幹)
太田 博史 (義務教育課主任指導主事)

工藤 真弘 (義務教育課主任指導主事)
夏井 博美 (総合教育センター主任指導主事)
佐々木雅弘 (総合教育センター指導主事)
柴田 弘喜 (総合教育センター指導主事)
佐々木泰宏 (総合教育センター指導主事)
山口 誉 (北教育事務所指導主事)
京野 真樹 (中央教育事務所指導主事)
倉田 和人 (中央教育事務所由利出張所指導主事)
畑 朋幸 (南教育事務所指導主事)
山田 仁美 (義務教育課指導主事)
櫻庭 直美 (義務教育課指導主事)
中山大一郎 (義務教育課指導主事)
中井 淳 (義務教育課指導主事)

★ 学校改善支援プランの 年度の表記について

今回から、本プランが活用される年度に合わせた表記に変更することといたしました。今後とも、各校において学校改善支援プランの活用をお願いいたします。

